

「二〇一五年度大会シンポジウム」特集 思想史学の問い方——二つの日本思想史講座をふまえて

コメント…〈日本思想史〉は存立可能なのだろうか？

澤井 啓一

今回のシンポジウムの企画は、『岩波講座 日本の思想』（岩波書店）が完結し、さらに『日本思想史講座』（ベリカン社）もほぼ完結するということを「記念」するものだと聞かされている。たしかにこの二つの企画には日本思想史学会に関わる多くの会員が寄稿しており、そのこと自体、〈日本思想史〉という研究分野の発展を意味していて、まことに慶賀に堪えない。ただ、私自身は日本思想史学会の会員であるものの、大会などにはあまり参加せず、熱心な会員とはいえない。また上記の二つの企画にも短い文章を寄せてはいるが、〈日本思想史〉という研究分野に特別なロイヤリティーを持っているわけではない。それゆえ、〈日本思想史〉の外縁に位置する

者としてコメントをしたいと思う。発題のお二人には優秀な若い研究者からの鋭いコメントが寄せられているので、私のものは俯瞰的かつ懐古的なものであることをお断りしておきたい。

私が日本思想史学会に参加するようになった七〇年代の中頃、この学会は東北大学を中心とするマイナーなものに過ぎなく、大会に参加して発表するにも毎年仙台まで出向かなければならなかった。では、その当時は〈日本思想史〉に関する研究がなされていなかったかと言えば、そうではなく、むしろ今よりも活発であったように思う。ただ、歴史学・倫理学・文学・宗教、さらには政治思想史という領域に分かれて、それぞれ独自に活動し

ていた。丸山眞男が指摘した「タコソボ」のように、である。

歴史学や文学の領域では、イデオロギー的な相違もあって、いくつかの対立する学会が作られ、時代の変化に対応し、また相互の相違を意識するような大会テーマが毎年のように立てられていた。また倫理学や政治思想史では、「本場」である西洋を対象として研究する人々——「近代日本人」の典型のような人々も多く、私なども学生時代に西洋思想の高名な研究者から「日本に思想などありますか？」と真顔で問いただされたこともあった——とともに活動せざるをえなかった。もちろん、こうしたことによって〈日本思想史〉研究は方法的に鍛えられていたわけであるから、悪い面ばかりではなかった。

その頃から今日に至るまでの間に、それぞれの専門領域から日本思想史学会に入り、多くの場合は二足あるいは三足の「わらし」を履くという状態であるにしても、〈日本思想史〉という研究分野で活躍する人々が増えたことは喜ばしいかぎりである。そこには、私と同世代の黒住真氏を始めとする、これまで学会運営に携わってきた人々の、専門領域を越えた交流が大きな役割を果たしているのだが、それについては学会の事業として当事者

たちに「聞き書き」されるのがよいように思う。私自身はほとんど傍観者の位置にあったのだが、それでも時にはかれらに誘われて会合などに参加し、学会の会員が増えるとともに〈日本思想史〉という研究分野が次第に姿を現してくるのを目にすることもあった。

こうした経緯から、最初に触れた二つの企画のように編集から執筆まで多くの会員が関与するという状況が生じたのである。七〇年代に出版され、〈日本思想史〉と銘打った講座物としてはおそらく日本最初であった石田一良・古川哲史編集の『日本思想史講座』（全一〇巻、雄山閣、八〇年代前半に出版された相楽亨・尾藤正英・秋山虔編集の『講座日本思想』（全五巻、東京大学出版会）などが、歴史や倫理学などからの「寄せ集め」と言った印象を拭えないことに較べたら、めざましい発展と言えるかもしれない。ただ、やはり七〇年代にいくつもの出版社からだされた原典資料集において、書き下しや現代語訳、それ以上に注釈の作成に関して〈日本思想史〉の研究者と目された人々がほとんど活躍できなかったことの「雪辱」はまだ果たされていないように思われる。出版業界の事情もあるので簡単ではないだろうが、将来の課題として指摘しておきたい。

ところで、このように発展してきた〈日本思想史〉と

いう研究分野は、けっして明確なものではない。といって、さまざまな専門領域のたんなる「寄せ集め」からはすでに脱却しているように思われる。現在の状況は、私の目にはゆるやかな人々の結びつきによる、ぼんやりとした「共通感覚」のうえに成立しているように映っている。そして、それはさきの二つの企画においても同様だと思われるのである。

ぺりかん社の『日本思想史講座』は、時代別の構成になっているため、とりたてて問題がないように見えるが、雄山閣版が当時の世相を反映して「日本人論」という項目を立てていたのを除くと、ほとんど相違がない。それだけ「歴史学」の区分として古代・中世・近世・近現代という分け方が定着しているからだろうが、近接する中国思想史や韓国・朝鮮思想史の領域で、「アジア的近世」（岸本美緒）や「儒教的近代」（宮嶋博史）といった議論が提起されているのに較べると、なんとも「無風」の、「鎖国時代」を想起させるような情景である。最近「近代」の研究者も増えてきたものの、「中世」「近世」は依然として多くの会員が集まっている領域であり続けている。しかし、中世＝仏教、近世＝儒教という区別は会員の「棲み分け」には適していないようが、〈思想〉という人間の営為を対象として扱う以上、それだけでよ

いのかという疑問を抱かざるを得ない。もちろん、自戒を込めての疑問である。

『岩波講座 日本思想』の方は、東大出版会版に呼応するようなテーマ別の構成となっている。ただし東大出版会版が「美」「時間」「秩序」といった個別の概念を取りあげていたのに対して、「自然と人為」「身と心」「秩序と規範」といった二項対立的なテーマが選ばれている。なにゆえにこうしたテーマの立て方をしたのかは分からないが、これこそ戦後から現在に至るまでの〈日本思想史〉研究に大きな影響を与えた丸山眞男の「発想＝方法」であり、まさしく近代主義的な方法論なのである。丸山が「自然と作為」や「正統と異端」、さらには「忠誠と反逆」などといった、一見すると対立的に見える概念を用いて、近代化に向かう潮流とそれを阻む基層的な日本的な潮流との対立という構図を描き、それによって〈日本の思想史〉を語ろうとしたことはいまさら指摘するまでもないだろう。「近代化」という物語を語ることは、現在ではもはや魅力的なものとしては受けとめられていないのだろうが、それにもかかわらず、いざ方法的に語ろうとすると、このような形で頭をもたげてくるのである。もちろん、これも自戒を込めての指摘である。さきにも述べたように〈日本思想史〉はさまざまな研

究領域からの「集合体」である。方法論もそれぞれの出身母体のものをそのまま持ち込み、それにあえて異を唱えないという「暗黙の了解」のもとに成りたっている。すくなくとも、私にはそのように見える。したがって、〈日本思想史〉は、方法的ではなく、じつは素材対象であるところの〈日本〉によって存立が可能になっている。しかし、その素材対象が本当に〈日本〉であるのか、なぜそう断定できるのかという問題にぶつかったとたん、私たちは何も語ることができない、あるいは何も語っていないという事態に遭遇するのである。〈日本思想史〉が、丸山眞男が言うところの「タコツボ」ではなく「ササラ」——正確には丸山の言う「ササラ」を転倒させた形であろう——となるような日が来るのか、いまの私はかつての丸山ほどには楽観的ではない。元来は素材対象に過ぎないはずなのに、現在の日本において過剰にまで肥大した〈日本〉という幻影に私たちは呑み込まれつつあるからである。

（恵泉女学園大学名誉教授）